

奈良・平城宮跡

1 所在地 奈良市佐紀町・法華寺町・北新町
 東院地区 一九七八年(昭和53)六月～十一月

2 調査期間 第一次朝堂院地区 同年四月～七月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 狩野 久

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡

6 遺跡の年代 奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡内では一九七八年度において二調査地区から木簡が出土している。

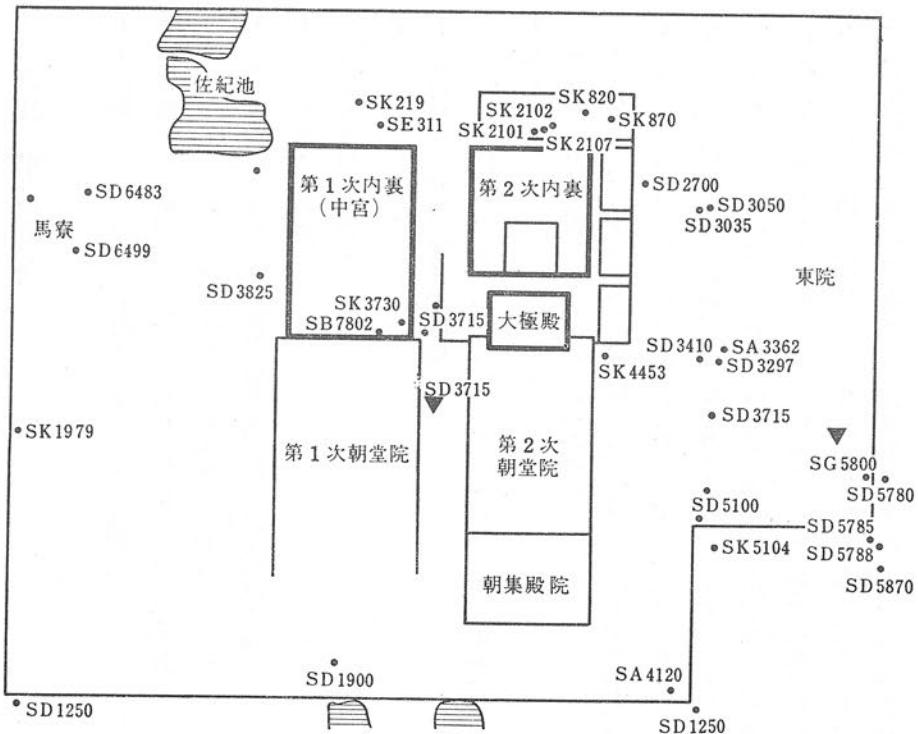
一 推定第一次朝堂院地区(第一二次調査)

宮中央部のいわゆる第一次朝堂院と称している地区の調査を北から順に九七次、一〇二次と行っており、東第一堂の規模や朝堂院の東限の堀・築地の構造、朝堂院東部の状況等が明らかになっていて、本年度も一〇二次のさらに南に続く個所で、東第二堂の規模確認を中心とした調査を行った。その結果第二堂は梁間四間、桁行十二間以上の規模を持つ建物で、さらに南へのびることが判明し、第一次朝堂院地区は第二次地区とは異なり、東西に各二棟の南北棟が配置される可能性が強くなつた。また朝堂院の東面の区画は、堀

↓堀→築地と三度の交替がある。この朝堂院東限から約一七m東の第一次朝堂院と第二次朝堂院の間に平城宮中央部の基幹排水路である南北溝がある。この溝から木簡が出土した。九七次、一〇二次調査においても同溝の上流からそれぞれ一六三点、二八点の木簡が出土している。ただしこの溝には両朝堂院地区からの東西溝が流入しているので、どちらの地区の木簡か決定することはできない。溝は素掘りで、幅は二～三m、深さ一mあり、三八m分を検出した。二回の改修が認められ、上・中・下の三層に分かれる。中・下層についてはそれぞれに二層の堆積がある。過去二回の調査の木簡の出土状況から、最初の改修は天平初年頃、二回目は平安時代に入つてからと考えられる。木簡は溝北部に集中して二十四点出土した。訳は上層溝下層八点、下層溝上層一四点、下層溝下層二点である。削屑は七点ある。この溝以外では発掘区東北隅の土壙から一点出土しているが、わずかに墨痕があるだけである。

二 東院園池北方地区(第一〇次調査)

平城宮東張出部の東院地区東南隅に新旧二時期の認められる園池遺構のあることが既に明らかになつてているが(四四次・九九次調査)、本調査区はその池の北側に接する場所である。今回調査の結果、三回の整地と、A期以前およびA～G期の八期に区分できる重複の著しい遺構が検出された。各期の絶対年代は決めていくが、今のところ、A期以前とはこの地区的本格的造営開始以前の和銅年間頃、A期は東院東面大垣造営時、B期は旧池が作られる養老年間以前、E



第1図 平城宮木簡出土地点図(1979年3月現在) (▼ 今年の木簡出土地)

期は新池が造成される天平勝宝年間以降と考えている。主な遺構は掘立柱建物一二棟、礎石建物四棟、掘立柱塀五条、溝一九条、石敷道路三条、土壤などである。性格的には発掘区南半は園池との関連地域とみてよさそうであるが、北半は園池と別個の地域となる時期もある。木簡は総点数六六点、うち削屑は三八点である。これらの木簡のうち二八点はA期以前の土壤・溝から、一九点はD期の溝から、他は整地土、柱穴掘形等から散在的に出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 推定第一次朝堂院地区

(1) 大伴 下層溝下層

□□□日下部□□×

(144)×8×3 019

(2) □進上女瓦三百□丁卅五人

(105+105)×(25)×5 081

(3) 「神龜五年十月□□秦小酒□麻呂」
(表裏異筆)

(183)×39×5 081

・遠江国敷智郡□呼嶋

(107)×22×4 081

(4) 上層溝下層
當 □匠丁十二×

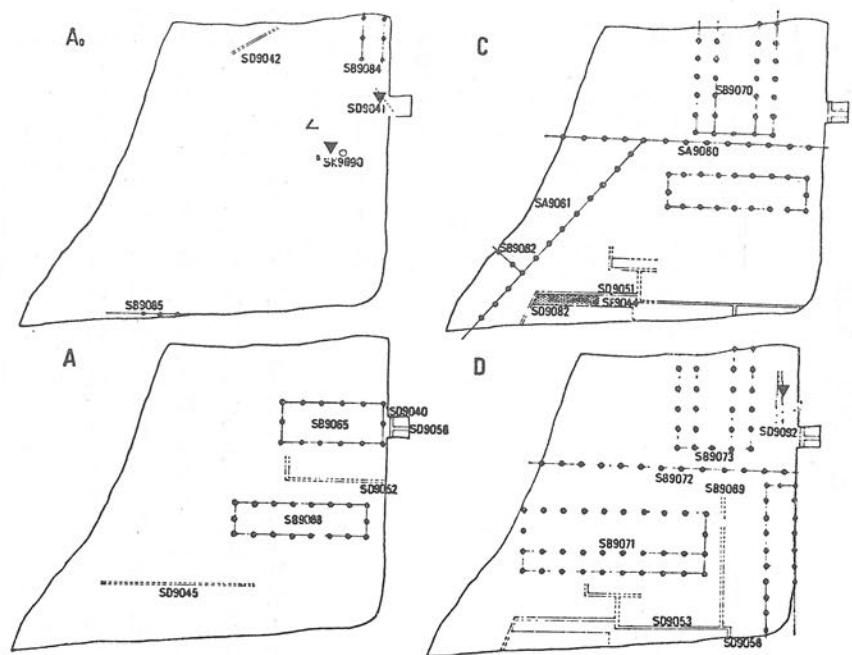
(212)×(35)×5 019

籠作鶉甘第□□□□□×(裏に墨痕あり)

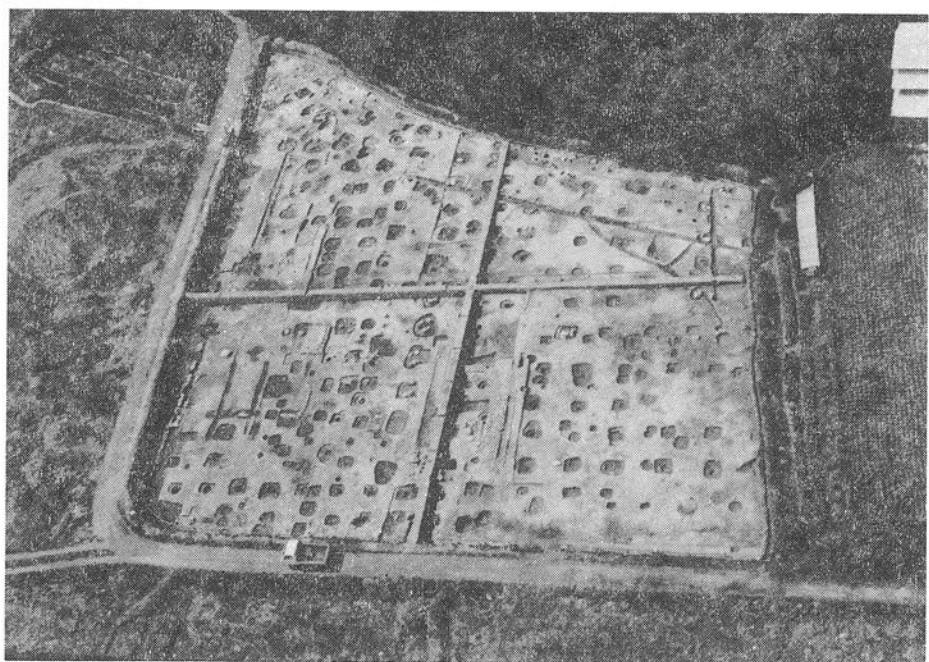
(212)×(35)×5 019

1978年出土の木簡

(6)	・「鵠 文倭 □□□□□ 安宗 寒川 都賀 阿田」	氏豊人 □□□足 阿 □□ □部男□
	・「□□ □□」	□□□□人 今月卅一日
	136×4×7 011	(異筆)『 □□□是』
		日曆
		□□□光
		『 □□□是』
		(251)×53×4 081
A期以前		
(1)	・「妹里 □□□里 □部里 □□□里 〔知カ〕 〔長カ〕	「△△方郡乃止三家人羽志米六斗△」
	前里 石寸里 青見里	141×32×6 031
(2)	〔大カ〕□甘首名 江野国足	(159)×(26)×3 081
		(95)×12×3 019
(3)	「下道人守□□×	(131)×(8)×4 081
A期		
	道百嶋 佐伯子□	091
□部真公 道東人 国広浜		091
D期		
(10)	(9) (8) 各田部林 膳部□	206×18×5 019



第2図 東院園池北方区時期別遺構図



第3図 東院園池北方遺構（全景）

(1) 八年八月七日

091

奈良・藤原宮跡

木簡は比較的古い時期の遺構に伴うものが多いが、年紀のあるものはない。断片や腐蝕しているものが多く、内容的にも全体を通しての特徴のようなものはうかがえない。この中では(1)の里名を列記したもののがこれまで例をみない特異なものである。里名のうち、前里は隱岐、青見里は參河と遠江、石寸里は土佐、媛里は伊勢と參河にみられる。なお柱根に「雇工春刀良」と墨書したものがある。

9 関係文献

- 奈良國立文化財研究所 同 同 同 同 同 同 同 同
『昭和51年度平城宮跡発掘調査概報』一九七七年
『同 52年度同』一九七八年
『同 53年度同』一九七九年
『平城宮跡発掘調査出土木簡概報(1)』一九七七年
『同』一九七八年
『奈良國立文化財研究所年報 1977』一九七八年
『同』一九七九年
『同』一九七九年
(2) 一九七八年
『奈良國立文化財研究所年報 1977』一九七八年
『同』一九七九年
1978
1979
(加藤 優)

第4図 東院地区出土の柱根墨書



6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九七八年度に出土した木簡は、藤原宮東面北門推定地に南接する地域での発掘調査でみつかったものである。当該発掘地において検出した主要な遺構は、宮東面大垣・それに伴う内濠と外濠、掘立柱建物二棟、堀一、溝二条、井戸一基、土壙一等である。木簡は外濠、内濠及び井戸から計一〇〇七点出土した。

外濠 外濠は東面大垣の東約20mのところを南から北へ流れる素掘りの溝で、幅6m、深さ1・6mをはかる。堆積層は大きく三層にわかれ、上中層は土器と多量の瓦をふくみ、木簡は多数の木片とともに三三八点出土した。この宮東面外濠は一九六七年にも奈良県教育委員会によって本調査地の北約200mの所で検出され、また奈良國立文化財研究所でも一九七六年に本調査地の南方600mほどの地点で二個所検出しており、いずれも木簡の出土をみている。

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
2 調査期間 一九七八年(昭和53)九月～七九年二月
3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者 工藤圭章

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡